

# IIAS NEWSLETTER

2003年8月発行

## 国際高等研究所

関西文化学術研究都市



国際高等研究所は、「人類の未来と幸福のために何を研究すべきか」を研究することを基本理念として、新たな学問の創造・進展を目指す「課題探索型」の基礎研究を行っています。

すなわち、人類の未来と幸福にとって不可欠な課題を発掘し、その問題解決に向かった研究戦略を展開する中で、学術研究における新しい研究の萌芽、或いは新たな学問の立ち上げにより広く世界文化の発展に寄与することを目的としています。

### 目次

けいはんな・茶会と文化学術講演会開催報告 「茶壺の美とは」：徳川義宣

IIASフェロー公開講演会開催報告

「美しい色、そして快い光 - 貝紫、竹取物語から携帯電話の端末の画面まで - 」：徳丸克己  
 掲示板 今後の予定、学術出版のお知らせ

## けいはんな・茶会と文化学術講演会開催報告

2003年5月24日（土）高等研にて第3回「けいはんな・茶会と文化学術講演会」を開催した。

1993年8月30日に、茶道裏千家前家元の千玄室大宗匠から御寄贈いただいた茶室「雅松庵」の披露を執り行ってから、今年で10年目となる。同年秋の本研究所開設以来、来所された方々に呈茶を行い、学研都市内の研究機関や行政機関の方々に参加いただいて小規模な茶会も行ってきた。また、1999年11月3日には、国際高等研究所創設15周年記念事業の一環として、千玄室大宗匠に御講演をいただくとともに、さらに広く一般の方々に茶室「雅松庵」を知っていただくために、「けいはんな秋の茶会と講演会」を開催した。その後本研究所では、文化活動の一環として我が国の優れた伝統、文化を次世代を担う若者達に引き継いでいくという視点から、2001年度より「けいはんな・茶会と文化学術講演会」を毎年開催することとなった。

本年度は、文化学術講演会の講師として、尾張徳川家21代当主・徳川美術館館長である徳川義宣氏をお迎えし、「茶壺の美とは」をテーマにお話を伺っ

た（講演概要は次ページ参照）。聴講の希望者が多く、臨時会場を設けることになった程の盛況ぶりであった。

今年も早朝から、一般応募の方々が茶会とお点前体験コーナーに参加された。けいはんな学研都市域のみならず、兵庫県や滋賀県など近畿一円からの参加があった。

茶会に参加された方は、緑の芝生とつつじのコントラストの美しい景色を眺められる待合を出て、若葉が映える庭を通り、茶室「雅松庵」へ席入りされた。茶席では茶道裏千家正教授である本間宗壽先生の説明に熱心に耳を傾けられ、薄茶一服を楽しまれた。

茶道を習ったことのない方でも、気軽に抹茶を点てる楽しみを知って頂こうと設けたお点前体験コーナーでは、指導者から点前の手ほどきを受けながら、交代で亭主と客を体験し、お互いの点てた抹茶を頂いていた。

茶会に240名、お点前体験コーナーに100名、講演会には190名の方々が参加された。（文責・事務局）





## 文化学術講演会 「茶壺の美とは」

徳川 義宣

(とくがわ・よしのぶ)

尾張徳川家21代当主、  
徳川美術館館長

茶壺、というのは、葉茶を詰めて運び、保存しておく容器で、現在ほとんど目立たない茶道具だが、千利休(1522～91)のころは、たいへん“位の高い”道具であったし、また「茶壺の美」を鑑賞されるまでに至る古い歴史がある。そこにある「美意識」とは、なにか。

万葉集(5C前半～8C半ば)に4516首載せられているが、きらびやかな大寺院やピカピカの仏像など人の手・技術で作った人工物(横文字でいうと“アート”)を称えた歌は、一つもない。反面、天然現象的なものや、花や鳥、虫の奏でる美しさを謳った歌はごまんとあり、しかも、細々としたところに目をつけている。また、古今和歌集(10C初め、20巻)には、桜を詠んだ歌が70首あるが、“散る風情”をテーマにしたのが、38首、“桜が見えない、見えにくい”との歌が12首を占めている、しかし、爛漫と咲き誇るさまを詠んだのは1首もない。「散ることを愛でる」「散るからこそめでたい」といった“亡びの美学”は、武士の「城を枕に討ち死」や「名誉の切腹」にも通じる。同じように、枕草子、徒然草、源氏物語などにも、“わざとならぬ美”という作為のないものの方を良しとする「美意識」が随所に見受けられる。

欧米諸国には、自然を“荒々しいもの”として捉え、技、つまりアートをふるって克服しなければならない、との宇宙観があるが、日本では、むしろ“より反アートの美”を求める。こうした美意識が、神代の昔から14世紀の初めまでに育ち、それが、形ある器の上に展開されたのが、実は「茶壺」だろうと思う。

茶壺の代表格は「ルソン(呂宋)壺」と呼ばれた陶製の壺で、ルソン島経由で南蛮貿易(開始は1543年)あるいは遑って勘合貿易(開始は1404年)により輸入が始まり、明代の最高級品がもてはやされて信長・秀吉時代にブームとなったと15年ほど前までは定説化されていたが、実は中国南部の産でその渡来は平安時代に既に始まっており、私は、「唐物茶壺」と呼び改めるよう研究機関などに提唱し今日では多くの機関が「唐物茶壺」と呼ぶようになっている。

「祇園執行日記」(1343年=康永二年)には、こうした茶壺を贈り物にしたり、「清香壺」を「三貫

文」(現在で約30万円?)という高値で質入れしたりするなど、多彩な記述が見られることから、単に実用的な価値評価ではなく、観賞的価値のかなり高い「評価」が加算されており、それを認めるマーケットが存在していた、と考えてよい。

(スライドを見ながら)なにかよく分からない模様のような印の押してある茶壺も多くある。そして、いろいろな印があり、清香とか洞香とかいろいろ呼び分けられていたが、「清香」という文字の印が最も多いため、しだいに、文字のいかんを問わず“印のある壺”をすべて「清香壺」と呼ぶようになったらしい。「蓮華王」(蓮華の模様と王の文字)はずっと後の1570年代に現れたもので、この印も各種ある。印、でなくて、ヘラで彫ったのもある。

このスライド写真は「判官」という銘のある壺で、利休が持っていた。この白い部分を「月」また他の部分を「星」といって茶人たちは喜んだが、ところが、これは土が悪く、窯の温度もうまうまかなくて、生じたもので、焼き物としては失敗作。「夕立」という茶壺も「景色はいいが、焼き物としては釉がムラになってしまった失敗作」と同じ類。作者が意図していない、つまりアートではなく、全く“窯の中のイタズラ”の出来なのだ。

15世紀になると、茶道の世界で、茶壺は「ハレの茶道具」ではなくなってしまう。いわば、ケの道具となり、プライベートに親しまれるようになった。種別名称ができて、さらに見分けが進むころ、「名物の壺」「名壺」という呼称が文献に出てくる。多種ある茶道具のなかで初めての事で、このような優れた茶壺には、秀歌を引用して命名した「曙」とか「九重」とかのニックネーム、即ち「銘」が付けられ始め、茶壺鑑賞の度合が種別から個別へとさらに深まっていったことを示す。

茶壺に展開された「鑑賞」「美の意識」というのは、材質の良さや技術の完全性、ということにはなく、しっちゃかめっちゃかで、人があえて計算して作ったものでないところにこそ、むしろ「面白さ」や「美しさ」がある、という価値観である。利休が完成したといわれる器物に対する「侘び・寂び」の美意識は、この茶壺に対して展開された鑑賞が初めと捉えられる。

(文責・事務局)

## IIASフェロー公開講演会開催報告

「美しい色、そして快い光 - 貝紫、  
竹取物語から携帯電話の端末の画面まで -

2003年7月5日(土)  
高等研レクチャーホール

徳丸 克己  
(とくまる・かつみ)  
国際高等研究所フェロー  
筑波大学名誉教授  
専門：有機物理化学



人類は太古の昔から、美しい「色」を追い求め続けている。有機化学の教科書にしばしば登場する「帝王紫 = 貝紫」は、古くフェニキアの時代に、地中海の港ティールで多くの貝からごく少量しか得られぬ特産品の天然染料で、それで染めた衣服が古代ローマで珍重されたが、元石川県立輪島高校教諭・日吉芳朗氏らが能登半島で集められた貝類から抽出に成功し、その染料を使った作品も生まれている。わが国の伝統的染料である「藍」も人々に愛用されているが、藍の染料の成分である「インジゴ」分子の2水素原子を臭素原子で置き換えるだけで「帝王紫」の分子となる。この2つの染料に限らず、分子の構造によって“吸収する光の波長が異なる”ことから、多種の染料と、多彩な色が生み出されてきたのは、「分子の世界」の妙味ともいえる。また、優れた合成染料等の新技術の開発が世界経済に影響を与えたという事実も見逃せない。

色、といえばカラー写真。天然光は、赤、青、緑の三原色で、それをキャッチする写真のフィルムは、それぞれの色に感じる3つの層から成り立っており、その3枚のフィルムを重ね合わせてキャッチした全景の色を再現する。この原理は、カラーテレビとも通じるものである。

当然のことながら「色」は、「光」が元である。植物に光が当たると、植物のなかの“日照時間が長くなった”と感じる物質が化学変化を起こして、芽や花の指令を出す。われわれにしても、目の中に光が入ってきて、視細胞の中にある物質が化学変化を起こす結果として、“物が見える”のである。つまり、「物質の分子が光(エネルギー)を吸収して“励起状態”が生成し、さまざまの化学反応を起こす」ことで、われわれの世界が成り立っている、といっても言い過ぎではないくらいだ。光のみならず、熱、化学反応、X線、紫外線、赤外線などの刺激を受けて光を出す発光、すなわち「ルミネッセンス」現象があり、光による刺激を受けている間のみ発光する「蛍光」また、刺激の後まで続く「燐光」を発する物質もある。

また、「光化学」の現象には、発光はじめ、光導

電性、フォトクロミズム、光増感、二色性、触媒、殺菌といった多様な現象が確認されており、これらの化学的特性を利用した技術・材料などが人々の生活向上のために、次々と開発されている。

例えば、光により色が可逆的に変化するフォトクロミック材料について、入江正浩九州大教授の研究室が、「ジアリールエテン」と呼ばれる一群の物質を発見し、世界最高の性能だとして十数カ国の数十の研究室が追跡している。半導体の特性を利用した「光化学電池」についても、“酸化チタンによる水の光分解”発見に続き、可視光で駆動する「色素増感太陽電池」、その改良型、と日本優勢で展開されてきたが、現在、性能を巡って世界的な競争状態となっている。また、故中野稔群馬大教授が化学者の令嬢らとともに、新しい筍が発光する現象を発見され、「竹取物語」のロマンを彷彿とさせられる一方、化学反応に伴う蛍光を利用する「ルミノール」は、犯罪捜査に活用されるとともに、推理小説の血なまぐさい場面で、よく出くわす。

電気という刺激で光るエレクトロルミネッセンス(EL)という原理は、この30年間、信号など、無機物を使って利用されており、自動車の計器とか、置き時計など生活必需品に光る品物は多い。近年、無機物質ではなく、有機物質を発光させる「有機EL」が開発され、超薄型テレビや携帯電話端末の利用のためのフレキシブル・ディスプレイが可能となり、高性能の発光のための室温での燐光性物質等や高分子など新素材の開発研究に、各国が凌ぎを削るような状況である。

こうした科学への期待を込めて、ノーベル賞を受けられた時の故福井謙一先生のスピーチを引用したい。「科学、というものが人間に幸せをもたらし、災害をもたらすことのないように祈る」。

この講演は色とその変化と発光について、講師らによる放送大学のビデオを始め、多くの方々や大学、学校、研究機関と産業界の協力による多数の映像や画像、さらに実物をふんだんに示しつつ進めたもので、最後には聴講者も参加して、化学発光の実演も行なわれた。

(文責・事務局)



## 掲示板

### 今後の予定

#### ・研究会 2003年9月～10月

月 日	プロジェクト名	研究代表者
9月3日(水)	「物質科学とシステムデザイン」SD分科会	金森 順次郎
9月9日(火)～13日(土)	「CMDワークショップ」	赤井 久純
9月19日(金)～20日(土)	「思考の脳内メカニズム」	波多野 誼余夫
9月26日(金)～27日(土)	「ナノスピントロニクスフォーラム」	赤井 久純
9月28日(日)	「センサー論」(東京)	鷲田 清一
9月29日(月)	「物質科学とシステムデザイン」全体会議(東京)	金森 順次郎
10月4日(土)	「開発途上国と日本人長期政策アドバイザー」	橋本 日出男
10月4日(土)	新庄フェロー研究会「スポーツ創製」	新庄 輝也
10月23日(木)～24日(金)	「『一つの世界』の成立とその条件」	中川 久定
10月31日(金)～11月1日(土)	「物質科学とシステムデザイン」全体会議	金森 順次郎

#### ・一般公開事業 2003年9月～10月

- 9月20日(土) 公開講演会「素粒子で探る宇宙の謎」政池 明 (IIASフェロー/奈良産業大学教授)
- 10月18日(土) 高等研<親子>サイエンス・スクール2003「君の不思議を探そう - 生き物がもつ再生の力 - 」  
岡田 益吉 (国際高等研究所副所長) 田村 宏治 (東北大学大学院生命科学研究科助教授)  
阿形 清和 (理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター 進化再生研究グループ グループディレクター)

#### ・本研究所開設10周年記念事業

本研究所が1993年10月にけいはんな学研都市に移転し、本年で10周年を迎えることから、10月25日(土)に学術講演会:「創造的な誤解はありうるか? - 異文化交流の場合 - 」講師: ジャック・ブルースト氏<高等研フェロー、モンペリエ・ポール・ヴァレリー大学名誉教授>(通訳: 中川久定副所長)等を開催する。

### 学術出版のお知らせ

#### 『情報生物学講義』

今後大きな発展が期待される学術分野における専門的人材育成を企図し、過年度に2回開催した高等研集中トレーニングコース「情報生物学適塾」は、その充実した内容が世界に誇り得るものであったとの高い評価を得ることができた。そこで、この講義内容を講義録として公表し、情報生物学分野の先駆的教材として活用されるようにとの期待を込めて『情報生物学講義』を出版することとした。この情報生物学講義は、講義内容別に19分冊とし、これまでに下記8分冊を刊行した。

タイトル( は最新刊)	著者	定価
「ホモロジーのない配列の解析」	美宅 成樹	¥600-
「連鎖解析の理論と実際」	鎌谷 直之	¥700-
「ESTのゲノムへの写像技術とその周辺」	森下 真一	¥600-
「遺伝子発現情報解析のための数理モデルとアルゴリズム」	阿久津達也	¥600-
「細胞のコンピュータ・シミュレーション」	富田 勝	¥600-
「分子系統学とその解析手法」	舘野 義男・深海 薫	¥600-
「文献からの情報抽出と体系化」	高木 利久・高井 貴子・福田 賢一郎	¥600-
	中村 春木	¥700-

お問い合わせ

国際高等研究所



International Institute for Advanced Studies

編集・発行 / 国際高等研究所

〒619-0225 京都府相楽郡木津町木津川台9-3

TEL: 0774-73-4001 FAX: 0774-73-4005

http://www.iias.or.jp/ e-mail: www\_admin@iias.or.jp